

公私にわたる感謝

名誉教授 中 島 三 千 男

—

鈴木陽一先生には「公私」にわたって感謝の意を表しなければならない。「公」というのは、私が2007年から2013年まで2期6年間にわたって学長を務めさせていただいた折、国際交流と「自己点検・認証評価」の二つの課題を担当する学長補佐に就任してもらったことである。

国際交流については他の方も触れられると思うので、簡単に触れるに留めるが、先生は中国語学科の教員として、当時同じく中国語学科教員として在籍しておられた東京大学名誉教授尾上兼英名誉教授の差配の下で、1990年に中国浙江大学と本学との本格的な国際交流の先鞭をつけた。

また特に2009年4月、中国遼寧大学副学長、故馬興国先生を中国の大学との国際交流を強化するために特別招聘教授にお招きして以降は、馬先生と二人三脚で北京大学や清華大学など、中国のトップクラスの大学との国際交流を深め、神奈川大学の国際化、ひいては神奈川大学の知名度の向上に大きな役割を果たした。

この中国を中心とする国際交流の仕事は、先生にとってはご自分の専門研究にも関わることであり、ある意味、楽しくてやりがいのある仕事であったと思う。これに対して、もう一つの担当、「自己点検・認証評価」の方はご自分の専門研究とは直接的には関係はなく、当時の大学の教員にと

っては「雑務」に属するものであったが、それにも関わらず「大学の為」という「大義名分」のために、立派に役目を果たしていただいた。

1990年代に入り、大学教育の量的拡大（ユニバーサル段階）やグローバル化の進展に伴い、日本の大学は大きな転換を余儀なくされていた。自立した「21世紀型市民」を幅広く育成するという新しい大学像が打ち出され（「学士課程教育」の充実）、他方で国際的競争力を備えた研究の充実が求められるようになった。また、大学は開かれた大学として社会に対する説明責任を強く求められるようになった。

文部省（2001年に文部科学省）はこうした転換を促すために、1991年に大学が「自己点検・評価」を行うことを努力義務として打ち出した（1999年義務化）。大学は自律的に自らの活動を点検・評価し、それを大学の改善・改革につなげなさいというものであった。神奈川大学はこれに应运て1994年「神奈川大学自己点検・評価全学委員会規定」を制定し、その委員会のもとで1994年と2000年に「神奈川大学の現状と課題—自己点検・評価報告書」を作成した。

文部科学省はさらにこれを発展させて2004年に、文部科学大臣が認証した認証評価機関による大学評価制度を導入した。各大学は7年以内毎に「自己点検・評価報告書」を認証評価機関に提出（「受審」）、認証評価機関はそれが自ら定める評価基準に「適合」するかどうかを審査し、その結果を社会に向けて公表するというものであった。

ところが、不思議なことに私が学長に就任した2007年の4月には、2009年度に認証評価機関の一つである、公益財団法人大学基準協会の大学（認証）評価を「受審」するということが決まっていながら、そのための準備はほとんどなされていなかった（2008年度の法務研究科の「受審」については省略する）。

2009年度に「受審」するためには、少なくとも前年2008年12月に

「自己点検・評価報告書」の草案を大学基準協会に提出、翌年 2009 年の 4 月にはその完成稿を以て「受審」を申請しなければならなかった。

そこで 4 月、学長に就任してすぐにこの体制づくりにとりかかった。まずこの「自己点検・評価」の実施部隊をまとめ上げるトップとして学長補佐を置くことを決定、鈴木先生に就任してもらった。遅れに遅れているこの作業を成功させるために、先生の突破力に期待したのである。さらに 10 月に学長室（佐藤武学長室長）の下にその実施部隊として認証評価事務室を置き、室長相良秀生をトップに、矢ヶ崎春奈、齋藤奈華子（翌年 4 月）の三人の事務職員を配置してもらった。

こうした整備の上に、具体的な「自己点検・評価報告書」作成の作業が全学的に動き出したのが 2008 年の 2 月で、2009 年 4 月の完成・大学基準協会への提出まで 1 年余という短期間の突貫工事であった。

さらに報告書の提出で終わりではなく、その秋に大学基準協会による二日間にわたる実地調査というものもあった（10 月 26 日、27 日）。この対応も大変なものであった。

この自己点検・評価の作業は教学部門だけで 7 学部 8 研究科 8 研究所と計 23 の部門があり、またその下に例えば学部では学科や教室、部会などの基礎単位があった。この基礎単位から、大学基準協会が定めた「理念・目的」、「教育研究組織」、「教育内容・方法」、「学生の受け入れ」など十数項目にわたる点検項目にそって分析・評価を積み重ね、そして最終的に大学としての点検・評価を行うものであった。

確かに、大学はこれまで 2 度にわたって「自己点検・評価報告書」を作成してきた経験を持っていたが、正式に認証評価機関による認証評価を受ける本格的なものは初めてのものであり、その作業は質量ともに前 2 者とは比較にならないほどの労力を費やせねばならなかった。

研究教育活動に力を入れてきた当時の教員にとって、直接的には「事務

作業」に思えるこの作業に時間を割くのはなかなか大変なことであった。認証評価事務室は全学から飛び込んでくるさまざまな質問や苦情に、時には寄り添い時には叱咤激励しながら作業を進めていった。

これまで、必ずしも全学的な仕事に就いてこれなかった鈴木先生に、彼の突破力を期待して担当の学長補佐に就任してもらったのだが、反面、全学の多様な教員をうまく纏めていけるかの一抔の危惧を持っていた。しかしながら、認証評価事務室の相良室長以下三人の事務職員との息のあった絶妙な関係プレーもあって、見事この作業を成功させたのである。「まわりの人の気持ちを汲み取り、やる気をうまく引き出してくださるのがうまかった」というのが事務職員三人の共通した鈴木評であった。

2009年3月に大学基準協会に提出した報告書は758頁、厚さ3.4センチにも及ぶ膨大なもので、添付した根拠資料はトラック1台分にも及んだ。そして翌年3月、大学基準協会より同協会が定める大学基準に「適合」しているとの評価を受けた。

今日では、この認証評価の仕組みも大きく変化しているようであるが、いずれにしても自身の研究活動とは直接的には関係のないこの仕事に、多くの時間を費やして携わり、成し遂げ、その後の神奈川大学の教学の発展の礎を築いてくれた鈴木先生に心より感謝する次第である。

二

さて、次に私の「私的」な面についての、鈴木先生への感謝の念を表明しておきたい。それは私の研究テーマに関わることである。

院生時代から近代天皇制を、近代日本における国家と宗教の側面から深めていくことを研究テーマに定めて以降、最初に国家神道研究、続いて1980年に神奈川大学に奉職して以降は、天皇の「代替わり儀式」研究に

専ら力を注いできた。しかし、1990年頃にはそれも一段落し、次の研究テーマを模索している時期であった。

ちょうど、その頃、鈴木先生から思いもかけない声を掛けられた。先にみた神奈川大学と中国浙江大学の学術交流の一環として企画された、本学人文学研究所と浙江大学日本文化研究所との第1回シンポジウム（1991年11月）が浙江大学で開催されたが（このシンポジウム報告は両研究所の編で『中日文化論叢』として刊行されている）これに参加しないかというお誘いであった。実はこれには伏線があって、このシンポジウムには歴史系として、当時神奈川大学に在籍しておられた著名な歴史学者故網野善彦先生が出席する予定であったが、先生の都合で出席できなくなったのである。その代わりに私にと、声が掛かってきたのである。網野先生と私ではまさに飛車角落ちで、代わりは務まるはずはなく、鈴木先生としては穴をあけるだけでの対応で済ませることも可能であったはずである。それにもかかわらず、私に「杭州大学のシンポジウムに参加しませんか」と声をかけてくれたのである。

これが私の新たな研究テーマ、そして今に続く「海外神社」研究に踏み出すきっかけになったのである。私にとっては初めての海外で、もちろんパスポートもこの機会に初めてとった。今では、当たり前のように海外に出かける時代であるが、30年前、1990年ごろはそれなりの覚悟のいることであった。初めての外国、そしてパスポートの取得、これを今後の研究に生かす手はないか。

ちょうど、そのころは1980年代中頃から、東アジア諸国で経済発展を主導してきた「開発独裁体制」が次々に崩れ、その体制の下で封印されてきた日本の戦争責任、戦後補償の問題がそうした国々から一斉に噴出してきた時期であった。そこで考えたのが、こうした流れに自分の研究を関わらせることは出来ないだろうか、ということであった。海外神社研究はこ

うして始まった。

杭州大学には飛行機で上海まで行き、それからは車で杭州に入ったのだが、上海では行き帰りの一泊を利用して、上海神社の跡地を訪れ、海外神社研究の第一歩を記した。

その後、2003年までに戦前の旧台湾、旧満州、旧関東州、旧中華民国、旧朝鮮、旧昭南島（シンガポール）など6地域、45社の跡地を踏査した。その蓄積をもとに2003年、神奈川大学の「人類文化研究のための非文字資料の体系化」というプロジェクトが文部科学省の「21世紀COEプログラム」に選定されると（研究代表者福田アジオ）、その一つの研究班に位置づけられ（～2007年）、本格的な共同研究が始まった。そしてそのプロジェクトの終了後も、その後継組織である「神奈川大学非文字資料研究センター」の一つの班の活動に参加、今日に至っている。

これまで、上記の地域に旧樺太、東南アジア地域を含めた戦前の「大東亜共栄圏」に包摂されたすべての国、地域に建てられた海外神社（約1700余社）の内、263社の神社跡を踏査。その成果は『海外神社跡地の景観変容—さまざまな現在^{いま}』（2013年、御茶の水書房）、『「神国」の残影—海外神社跡地写真記録』（写真家・稲宮康人と共著、2019年、国書刊行会）にまとめることが出来た。

一般に、研究テーマは本人の沈思黙考の上で決まるものであるが、しかし往々にして偶然的要素によって決まる場合もある。私の今日までに続く海外神社研究も、鈴木先生の「杭州大学のシンポジウムに参加しませんか」という思いもかけない一言によって始まったのである。

鈴木先生に深謝する次第である。